南山９号窯跡（古窯館）

復元古窯

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見　せと　歴史と文化財を知る見学会

「文明開化とやきもの－連房式登窯の焼成実験の見学－」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和３年１１月７日（日）
午前の部：１０時００分～１２時００分
午後の部：１時００分～３時００分

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

本地大塚古墳（西本地町2丁目）

宮地古墳群（上之山町2丁目）

広久手 30 号窯跡
木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県
木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県

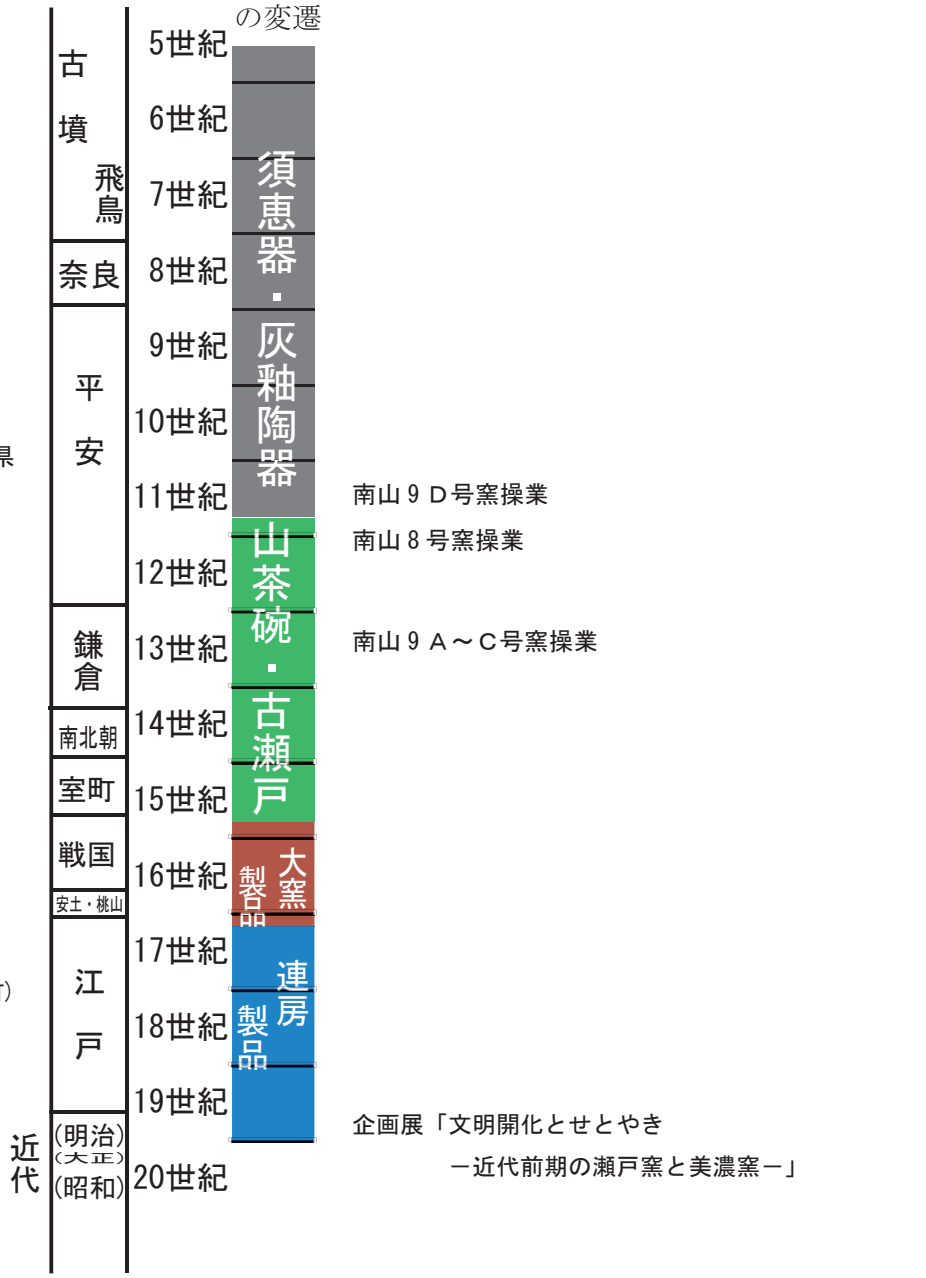
古瀬戸瓶子（寺本町）

陶製狛犬（深川町）国

瀬戸窯跡【小長曽窯跡】（東白坂町）国
永享年銘梵鐘
聖徳太子絵伝（塩草町）

定光寺本堂（定光寺町）国
織田信長制札（窯町）
菱野郷倉『大般若経』［一部鎌倉］
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（凧山町）国
源敬公廟（定光寺町）国
笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町）
石造地蔵菩薩立像（片草町）

陶質十六羅漢塑像（寺本町）
六角陶碑（藤四郎町）
旧山繁商店（仲切町・深川町）国登
瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登
陶製梵鐘（深川町）



窯構造の変遷

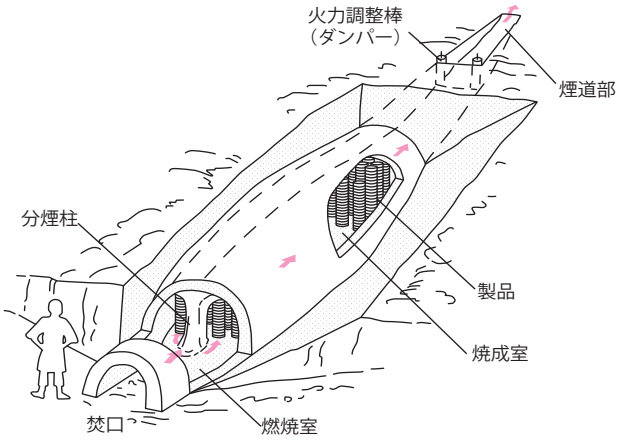
「せともの」の名称で知られるやきものの町、瀬戸市。千年以上焼き物をつくり続けてきた瀬戸市では、これまで平安時代から江戸時代にかけての窯跡が813か所で確認されています。この中で、最初に築かれたのが海上の森にある「広久手第30号窯跡」と考えられており、現在も発掘調査された当時の姿のまま保存されています。

広久手第30号窯が焼き物を焼いたのは、10世紀の中頃、平安時代の中期にあたります。この時代に使われた窯は、「窖窯（あながま）」と呼ばれるもので、丘陵斜面をトンネル状に掘りぬいた地下式、もしくは半地下式の単純な構造のものでした。窖窯は手前から燃料である薪をくべる「焚口」、薪を燃やす「燃焼室」、製品を置いて焼く「焼成室」、煙突にあたる「煙道部」に分かれていました。この構造の窯体は室町時代までの約500年間築かれ続け、瀬戸市内では今回見学する「南山9号窯跡」や、国の史跡に指定されている「小長曽陶器窯跡」でも当時の姿を見ることができます。

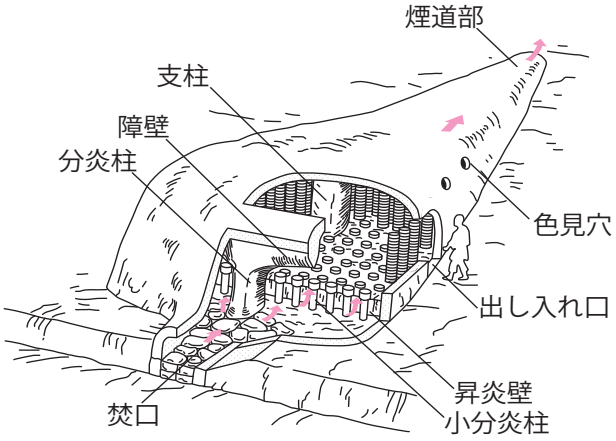
15世紀末、戦国時代になると、新しい構造の窯が登場します。「大窯（おおがま）」と呼ばれるその窯は、地下式の窖窯とは異なり窯体を地上に構築したもので、天井を高く架けることにより窯内の容積を大きくすることが可能となり、生産量が飛躍的に増大しました。地上に構築されるようになったため、焼成室には天井を支える天井支柱が設けられたほか、窯内の熱効率を高くするため、分炎柱左右に障壁を垂れ下げ、燃焼室の床面に小分炎柱と昇炎壁を設けて窯内の燃焼ガスの圧力を高める工夫がなされました。

江戸時代初期には、焼成室が階段状にいくつも連なった「連房式登窯」が瀬戸でも採用されるようになります。窯体全体の大きさは、これまでの大窯と比べ極めて長大となり、一度に焼成可能な製品の量もさらに多くなります。ただし、一つ一つの焼成室の容積は大窯に比べて小さいうえに、下の房からの廃熱がそのまま上の房でも利用されるため、熱効率に非常に優れた窯体だったといえます。

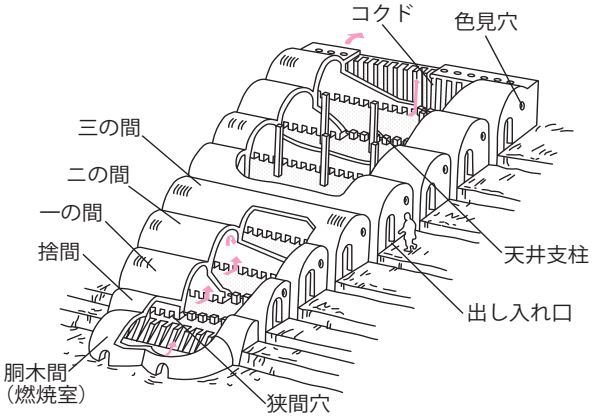
なお、この連房式登窯を改良して、江戸時代後期には大型の磁器製品を焼成するための「丸窯（まるがま）」が、また、江戸時代の終わりごろには「古窯（こがま）」と呼ばれる小型の磁器製品を生産するための窯体が登場し、この頃から従来の陶器生産を行った連房式登窯のことを「本業窯（ほんぎょうがま）」と呼ぶようになりました。このうち、瀬戸染付工芸館には市内で唯一残された古窯が市の指定文化財として保存されています。



窖窯模式図



大窯模式図



連房式登窯模式図

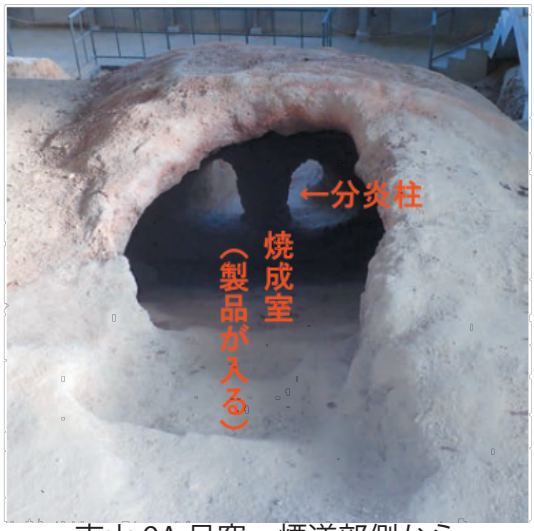
南山８・９号窯

南山８・９号窯跡は、瀬戸市域の最も南の丘陵である幡山丘陵のほぼ中央部に位置し、標高135m前後の南向き斜面に立地していました。

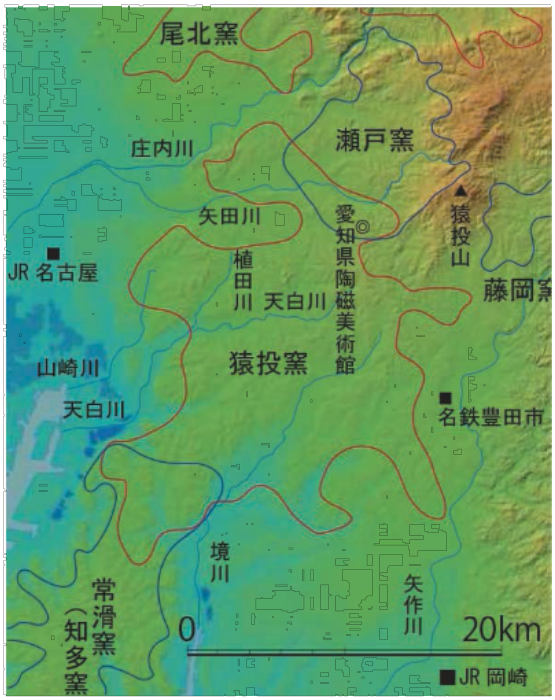
愛知県陶磁美術館の駐車場を作る際に発掘調査が行われ、二つの窯跡のうち、９号窯跡は9A・9B・9C・9Dの４基の窯体で構成されていることがわかりました。

８号窯は、煙道部から焼成室上方が削れて無くなっていました。残存する長さは5.4m、最大幅は2.4mを測ります。この窯で生産されたやきものは、「山茶碗」と呼ばれる釉薬が施されない日常雑器で、出土した山茶碗の年代から、この窯の操業は11世紀末～12世紀前葉と考えられます。

南山８号窯　焚口側から



南山9A号窯　煙道部側から



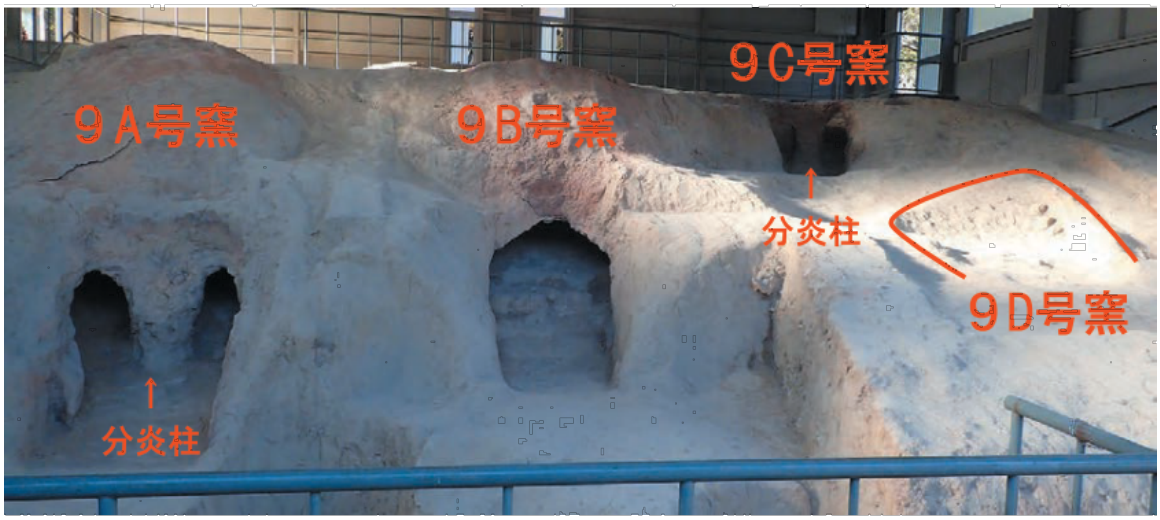
９A号窯は、窯に向かって一番左側に構築された窯体です。煙道部の先の部分が削れて無くなっていましたが、それ以外は非常に残りのいい状態で発掘されました。長さは7.5m、幅は2.7mで、天井がほぼそのまま残っていたため、床面から天井まで最大1.3mの高さがあったこともわかりました。この窯では、13世紀中ごろの山茶碗が生産されました。

9B号窯は9A号窯右側に構築された窯体です。長さは7.9m、幅は2.8mあり、9A号窯よりも大きいのが特徴です。操業時期は13世紀中ごろと思われますが、9A号窯の後に操業したと考えられています。

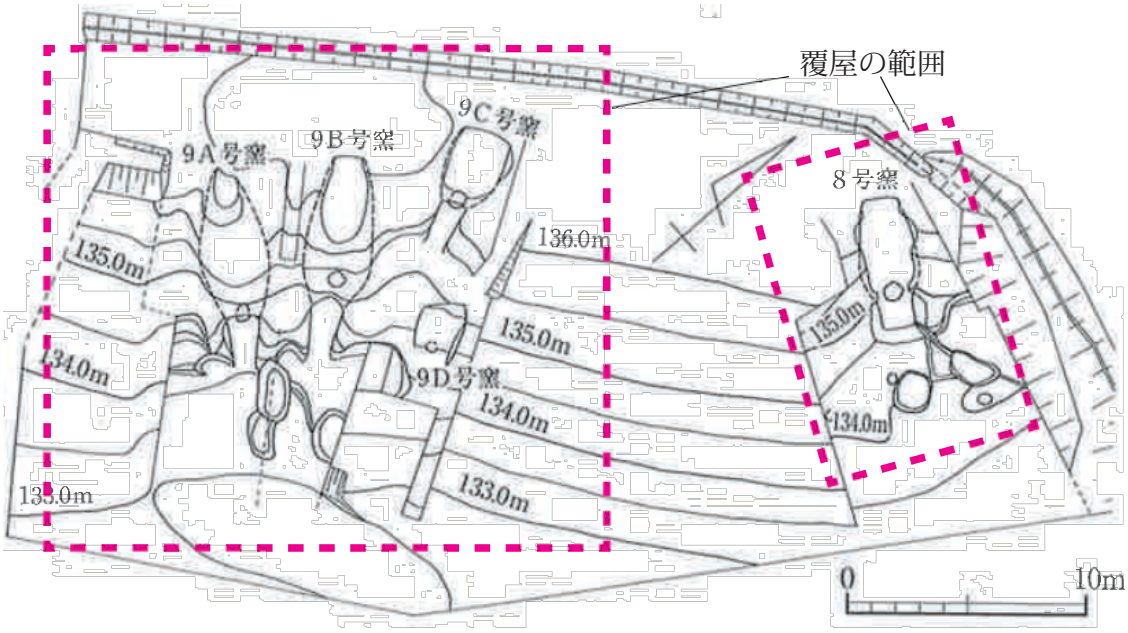
9C号窯は9B号窯のさらに右側に構築された窯体です。焼成室の上半が滅失してしまっていますが、残された床面には「焼台」といわれる、製品を床面に据え付けるための窯道具が残されていました。この焼台を観察すると、据え付けられた山茶碗の高台の跡が残されているのがわかります。操業年代は13世紀後葉で、一番最後に稼働した窯であることがわかっています。

この他、9C号窯の焚口手前に9D号窯が確認されました。この窯は一番早く操業を開始した窯で、11世紀中ごろに「灰釉陶器」と呼ばれる、釉薬を施したやきものを生産していました。

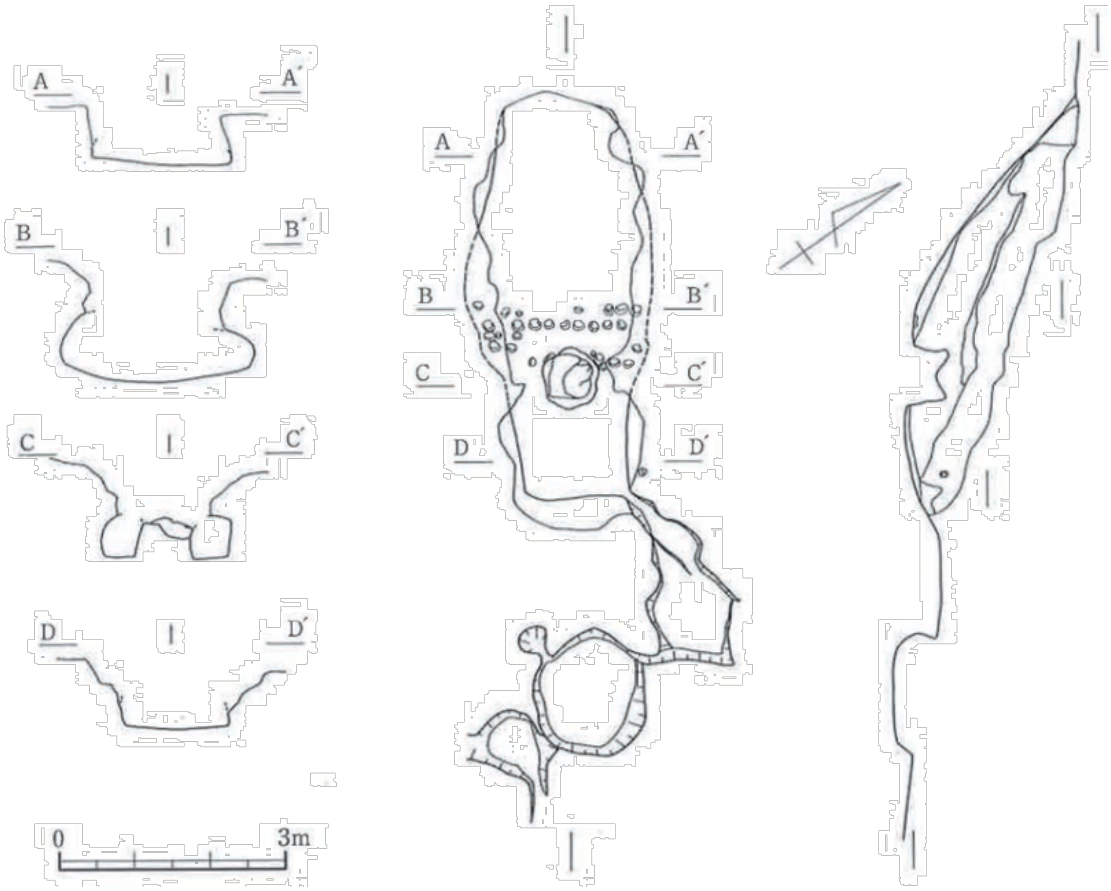
南山 9C 号窯　焼成室側から



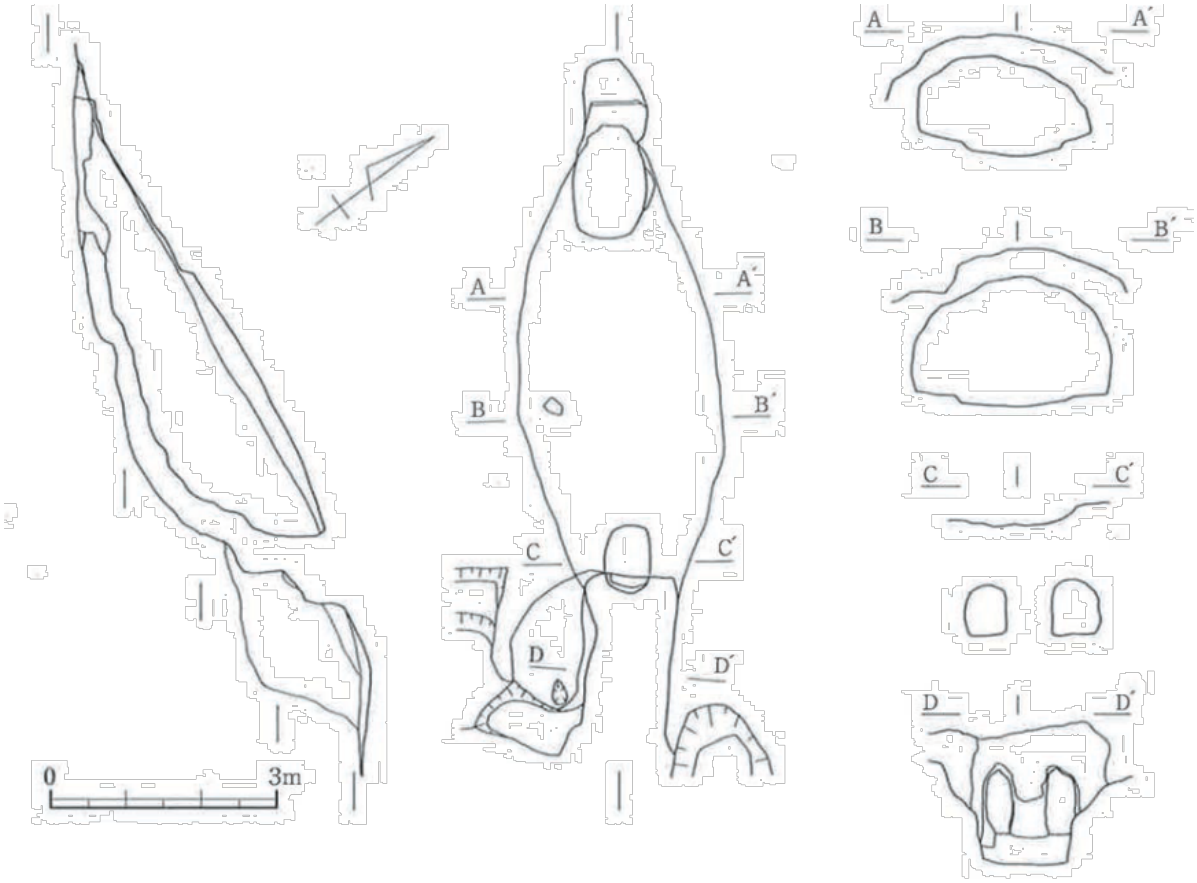
南山 9 号窯　全景



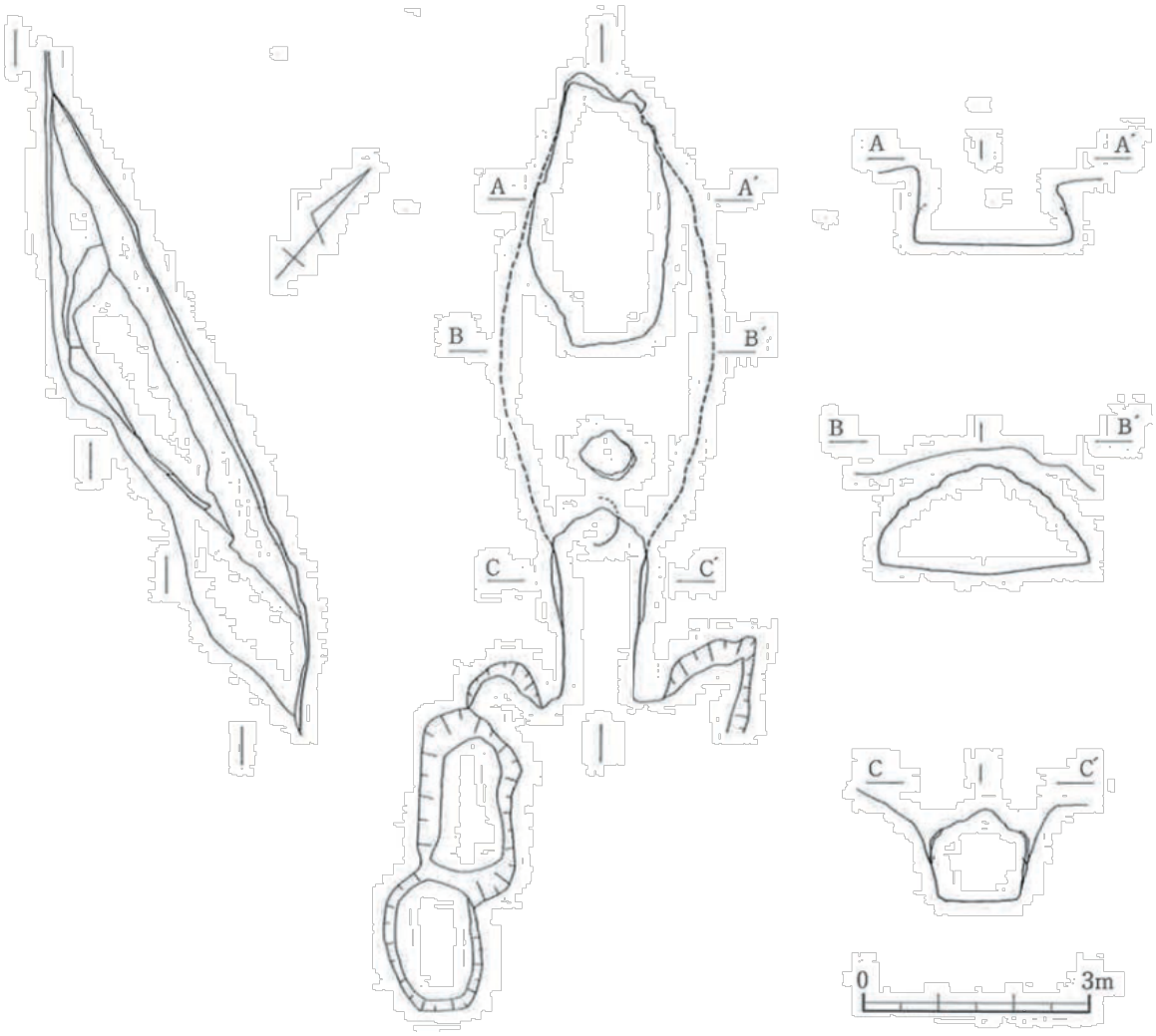
南山８・９号窯跡　窯体配置図



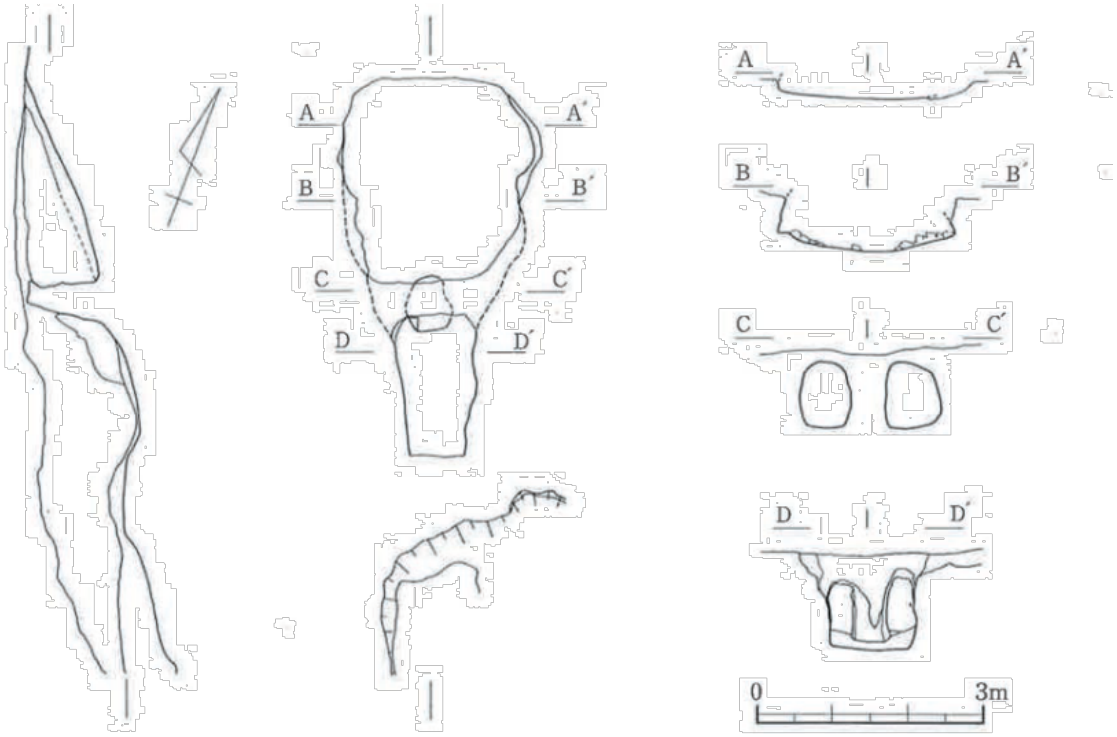
南山８号窯　窯体実測図



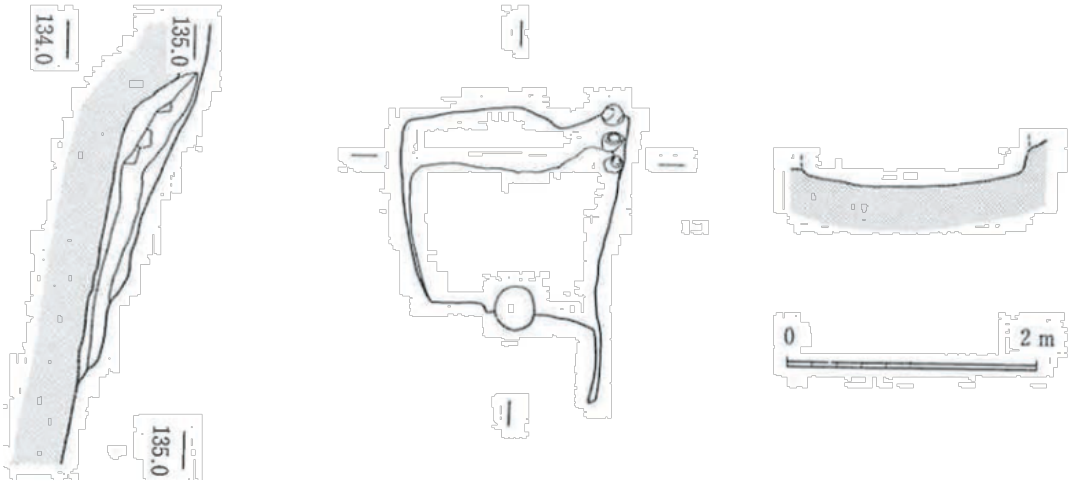
南山 9A 号窯　窯体実測図



南山 9B 号窯　窯体実測図



南山 9C 号窯　窯体実測図



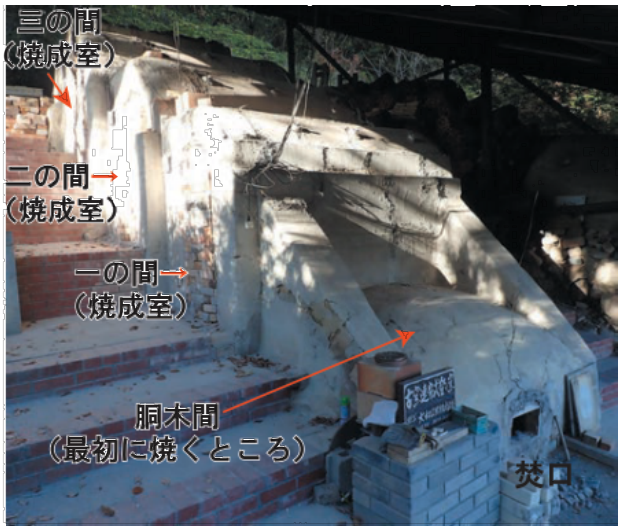
南山 9D 号窯　窯体実測図

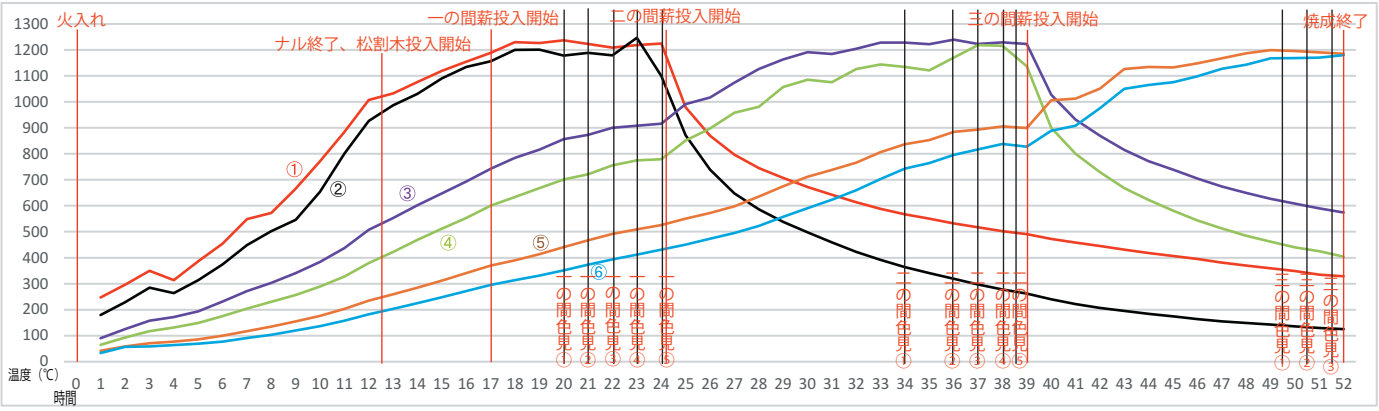
復元古窯（登窯）

江戸時代末期から明治時代初頭に瀬戸で使われた窯を復元したものです。磁器・陶器双方を焼くことができます。

南山８・９号窯が１本のトンネルのような形をしていたのに対し、こちらは小さな部屋がいくつも連なる形をしています。下の部屋から上の部屋へと炎が順に上に登りながら焼いていきます。

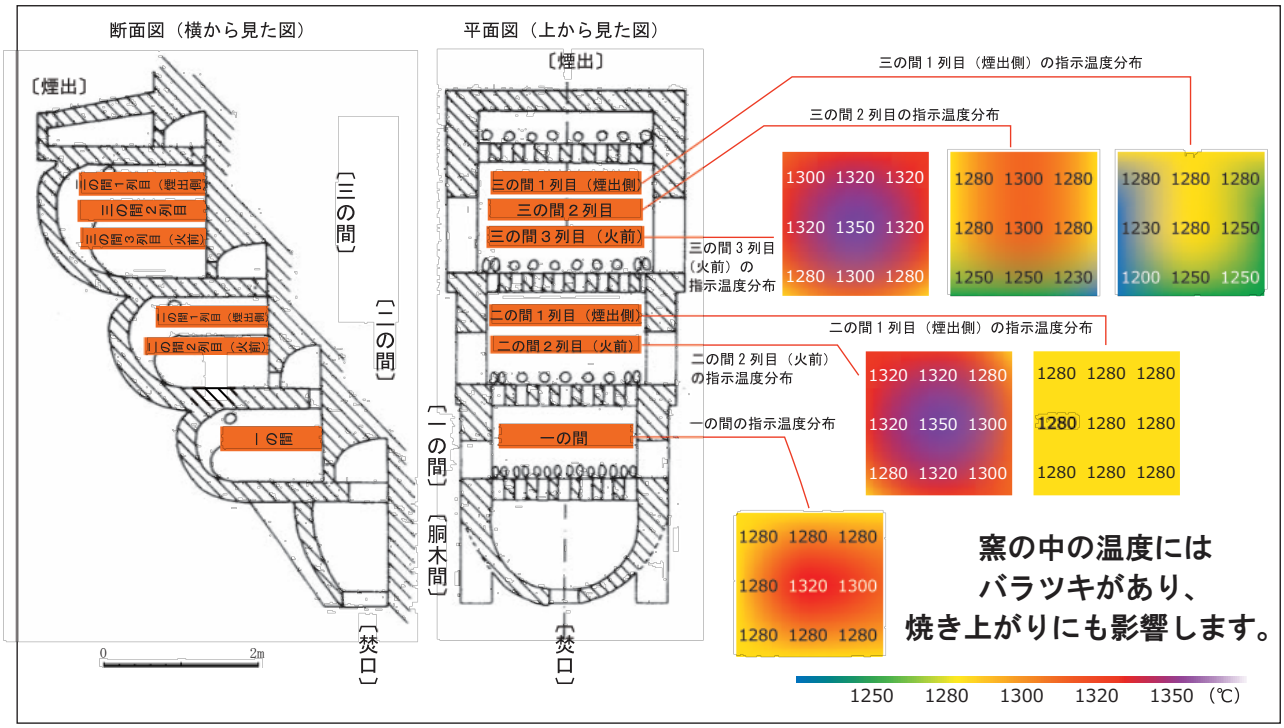
毎年１回行われる窯焚きによって、様々なことがわかってきました。





①：一の間天井付近　②：一の間床面付近　③：二の間天井付近
④：二の間床面付近　⑤：三の間天井付近　⑥：三の間床面付近

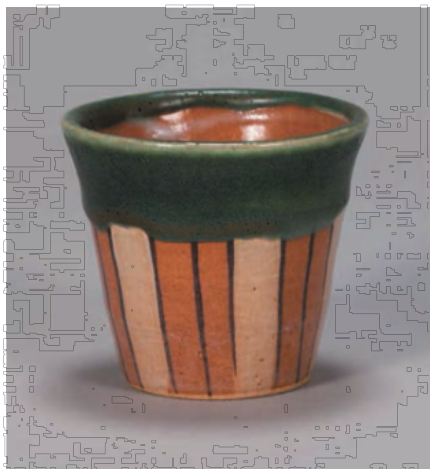
焼成室別の温度変化



窯入れの様子

胴木間に薪を投入

三の間に薪を投入



一の間で焼けたもの

二の間で焼けたもの

三の間で焼けたもの

窯の位置による焼き上がりの様子の違い

今後のスケジュール

＜3月＞

せと歴！　「秋の馬ヶ城」

日　時：令和３年11月28日（日）　午前９時～12時　午後１時～午後４時
集合・解散場所：馬ヶ城浄水場
内　容：普段一般公開されていない馬ヶ城浄水場内の施設を見学するとともに、東側に拡がる森の中を散策します。森の中には中世のやきものを焼いた窯跡が数多く残されており、また、様々な植物を見ることができます。次回の「せと歴！」は、こうした馬ヶ城の歴史と自然に触れていただくコースとなっています。
参加費：無料
定　員：20名
申し込み期限：11月18日（木）
※申し込み多数の場合抽選となります。11月22日（月）に抽選結果をお知らせします。

瀬戸市歴史文化ホームページ

昨年度、新たに瀬戸市の歴史文化に関するホームページ「瀬戸市の歴史・文化～１０００年以上の歴史を誇るせとものの まち 陶都瀬戸～」を開設しました。
これまでに開催した「まちめぐり」の資料や瀬戸の古い町並みなどの写真、さらに昨年度刊行した瀬戸市歴史文化ガイドブック「千年続く誇りを巡る旅」、瀬戸を知るテーマ別ガイド「のんびりじっくりせとマップ」、瀬戸の百科事典「瀬戸ペディア」などが閲覧・ダウンロードできます。ぜひご活用下さい。

アドレス：http://seto-guide.jp/

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団